

# 文学の風景

521

▼浅田次郎

『シェエラザード』

中学生の頃、浅田次郎の作品を家族と読むのが楽しみの一つだった。新作が出るたびに図書館で借り、順番に読んで、登場人物の魅力や感涙した場面について語り合った。そのうち、

気おくれして感想を交流できなかつた作品がある。一九九九年刊の『シェエラザード』だ。

太平洋戦争末期に起きた、弥勒丸という船の撃沈事件をめぐる小説は展開する。弥勒丸は長崎で造ら

れ、横浜―サンフランシスコ間を就航する「太平洋航路のエース」と銘打たれた美しい豪華客船だったが、

## 太平洋戦争末期に起きた豪華客船の沈没事件

### 今こそ語りたい戦時下の船と人々

輸送船として白羽の矢が立ったのが弥勒丸だった。ところが、国際条約において保護され、決して攻撃されないはずの弥勒丸は、救援物資だけでなく、多数の民間人を含む二千三百人とともに海に沈んだ。「誤爆」

れた軽部順一は、新聞記者であり若き日の恋人だった律子の協力を得る。律子は弥勒丸の唯一の生き残りである中島や、元陸軍少佐・土屋などから証言を集める。土屋は弥勒丸をめぐる陰謀に気づいて軍に監禁さ

侵略戦争のために本来の目的で航海することはかなわず、軍に徴用され、病院船として使役された。一九四五年春、連合軍が国際赤十字をつうじて、日本軍に捕らわれた自軍の捕虜たちに救援物資を送るにあたり、

とされた、米軍の四発の大規模な空襲によって、沈没から五十年後、宋英明と名乗る台湾の老人が日本を訪れ、弥勒丸の引き揚げに執念を燃やす。彼からサルベージ費用百億円の貸与の便宜を図るよう求めら

れ、婚約者の百合子の乗船も止められず、戦後は贖罪のために生きてきた。弥勒丸のモデルと思われる「阿波丸事件」は実際に起きた事件だが、当時の私はその存在さえ知らなかった。侵略戦争の歴史も知ら

なかった。無知ゆえにか、他の浅田作品と同じように感動を語ることができず、読んだという事実のみを家族に伝えた。ただ、弥勒丸の謎に迫る律子が、誇りの船と愛する人を理不尽に奪われた人々に対して、その手に触れ、そして最後の一人を抱擁する姿は、忘れがたく記憶に残った。

あれから十数年。作者の浅田次郎は、会長を務める日本ベシムで、「戦争と文学」と題して基調講演を行ない、戦時に生きた人々を描くことは小説家としての使命だと

に、今度こそ家族と一緒に『シェエラザード』について話してみたい。

(日本民主主義文学会 岩崎 明日香)



サンフランシスコの港と客船